



教育の質が保証されている大学とは

－明治大学における教育改革と教学マネジメント－

質保証システム部会（第7回） 話題提供資料

2021年1月25日

前明治大学長 土屋 恵一郎

トピック

はじめに－明治大学の概要

- 1 教育の質が保証されている大学とは
- 2 話題提供と本部会における論点との関連
- 3 **教育の質向上に向けた明治大学における諸改革の推進**
 - － 多様な学び（アクティブ・ターム）と主体的な学び（アクティブ・ラーニング）を促進する「総合的教育改革」
- 4 **改革を支える明治大学の教学マネジメント（質のマネジメント）**
 - ・ ビジョン・目的の明確化
 - ・ 目的の共有と、階層化された計画に基づくPDCAサイクル
 - ・ データ志向
 - ・ 評価とアクションの連携
 - ・ 国際標準性
- 5 課題と展望

はじめに－明治大学の概要

● キャンパス

- 駿河台キャンパス（JR お茶の水）
- 和泉キャンパス（京王線 明大前）
- 生田キャンパス（小田急線 生田）
- 中野キャンパス（JR 中野）

● 教育プログラム

- 10学部、12研究科・4専門職研究科
（学部）法、商、政治経済、文、経営、理工、農、
情報コミュニケーション、国際日本、総合数理

● 学生、教職員数（2020年5月現在*）

- 学生数（学部，大学院）：32,810名
 - ✓ 一都3県出身学生比率：68.0%
 - ✓ 女子学生比率：34.9%
 - ✓ 外国人留学生比率：5.0%
- 専任教員数：995名



* 明治大学IRデータベースより算出

1 教育の質が保証されている大学とは

～ 教育改革・改善に向けた検討の常態化・循環化

教育の質が保証されている大学とは

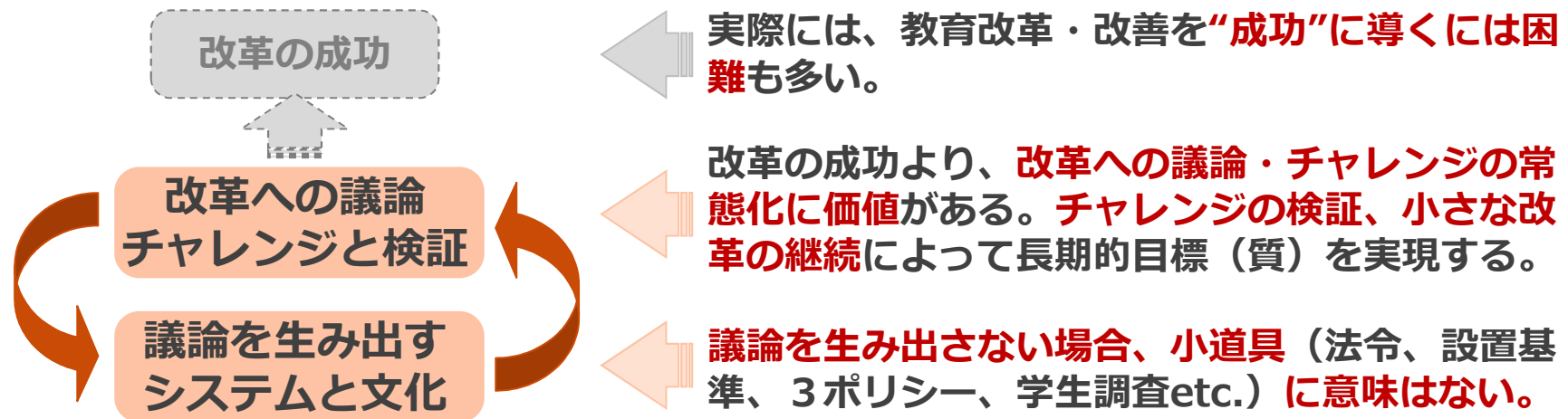
● 大学の責務

1. 教育プログラム（カリキュラム、教員組織）、②学習環境（LMS*、図書・学術、施設設備）、③それらのサポートの提供に責任をもつこと=質保証
2. 常時、教育活動を改善するための議論・試行（チャレンジ）していること=方針の明確化、教育効果の検証、継続的な改善



● 教育の質が保証されている大学とは

改革の成功だけではなく、①改革に向けた議論・試行（チャレンジ）の常態化、②常態化させるシステム構築と文化の定着していること

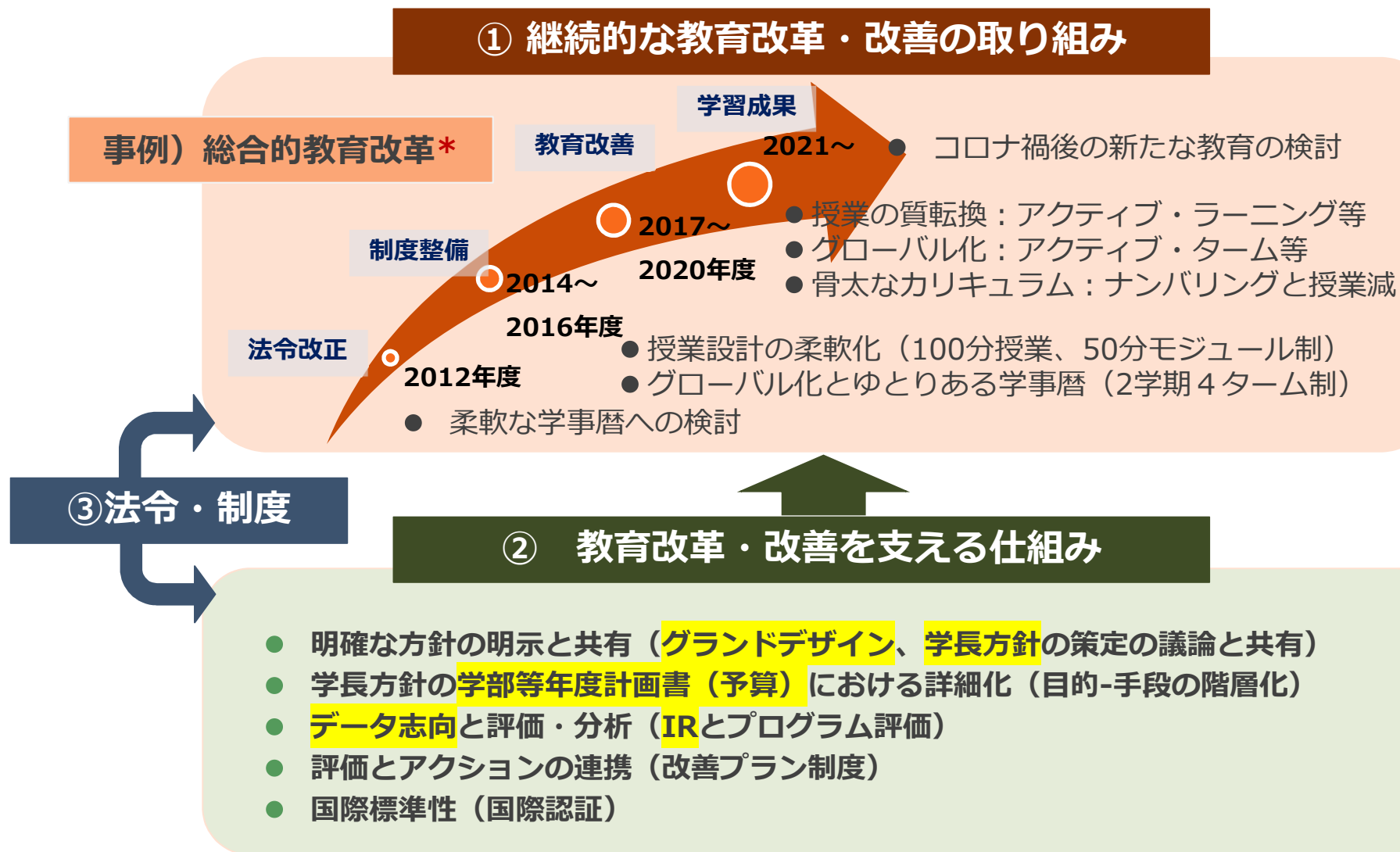


* LMS : 学習管理システム (Learning Management System)

2 話題提供と本部会における論点

～ 教育改革・改善の試み、試みを生み出すシステム

話題提供と本部会における論点との関係



* 参考）千田亮吉（2017a）「100分授業が目指すもの」『大学時報』2017.9月号

3 教育の質向上に向けた明治大学における諸改革の推進

～ 「総合的教育改革」に基づく継続的な教育改善

改革の端緒：学内での問題認識（2012年度以降）

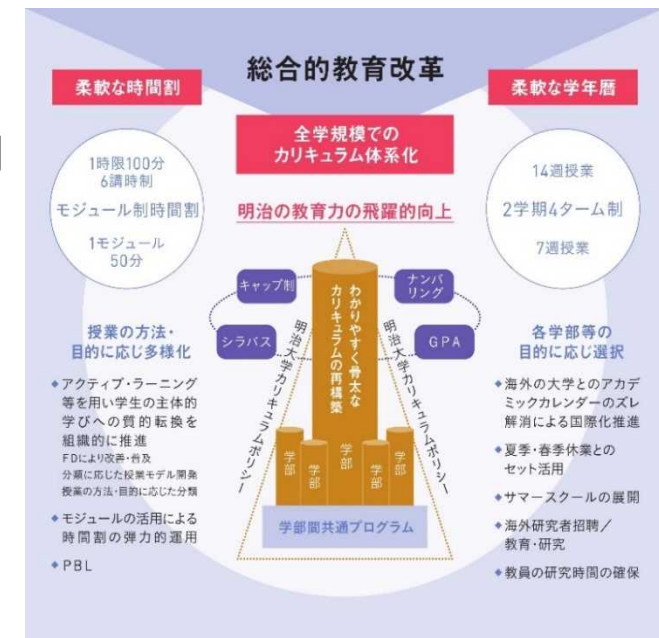
- 学外環境（国際化、情報化、学生の学習行動）の変化
 - ・ 単位制度の実質化、学習時間の確保の要請
 - ・ 能動的学修への変容（初等・中等教育との連結）
 - ・ 国際流動性の低さ（海外大学の学事暦とのズレ）
 - ➡ 学士課程答申（2008年）、質的転換答申（2012年）などによる提言
 - ➡ **大学設置基準の改正（2013年）：10週・15週以外の多様な授業期間**
- 学内環境（環境変化への対応）における主な課題
 - ・ カリキュラム充実と授業数の増加のバランスが崩れ、学生本位の**分かりやすいカリキュラム（体系化）**を構築できていなかったこと
 - ・ 教室事情が逼迫し、週2回開講、1単位科目などの**柔軟な授業設計**に支障が生じ、**能動的学修（アクティブ・ラーニング）**も行いにくい時間割であったこと。
 - ・ すべての授業期間に必修科目があるなど、**留学プログラムの授業期間**との整合が難しくなってきたこと

教育の質向上に向けた諸改革「総合的教育改革」

総合的教育改革（2014年度～）

一 教育制度 ➡ 授業・カリキュラムへの継続的改革（国際化・多様化）

- 短期取組み（2014～2016）
 - 柔軟な授業設計と授業時間を確保
 - ➡ 100分14週授業、50分モジュール制の時間割
 - 海外大学とのズレ解消と多様なカリキュラム編成
 - ➡ 2学期4ターム制によるゆとりある学事暦
- 中期取組み（2017～2020）
 - 授業の質転換：アクティブ・ラーニング
 - グローバル化：学生の主体的活動を行う期間（アクティブ・ターム）の設定
 - 骨太なカリキュラム（体系化）：ナンバリングと授業科目数の削減
- 国際化・多様化の実現：次世代の教育へ（2021～）



* 総合的教育改革概念図

制度改正から制度活用（教育実践）への順次的、循環的な教育改善

事例1) 授業 (アクティブ・ラーニング導入等) の質転換・改善

● 2014～2017年度：制度設計

- ✓ 柔軟な授業ができる時間割設計：
100分14週授業 50分モジュール制



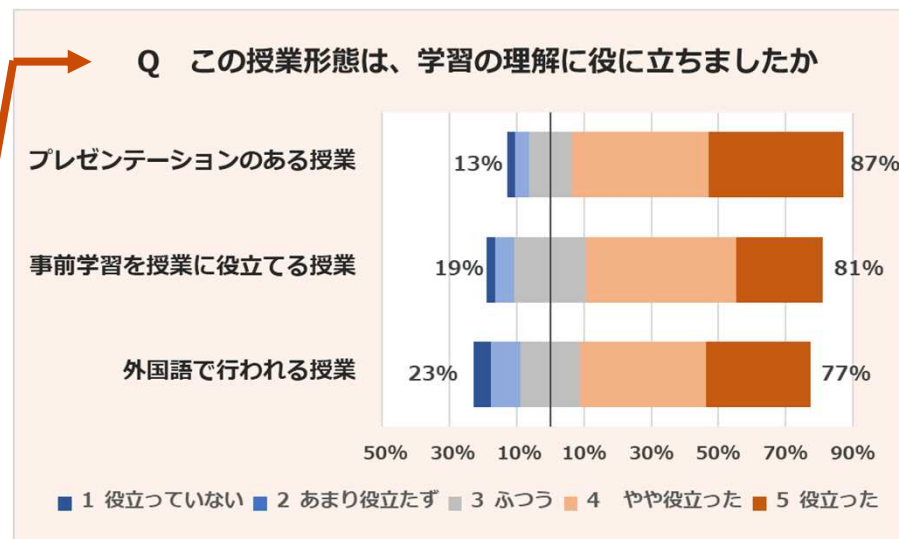
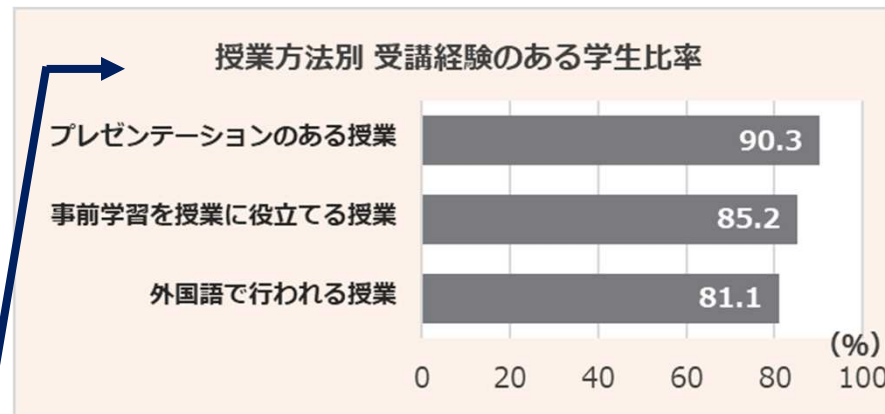
● 2016年度：FD、授業研究

- ✓ アクティブラーニング事例集
- ✓ 100分授業導入に関するFD



● 2019年度 学生の学習行動と評価*

- ・ アクティブ・ラーニング（プレゼン、反転授業等）の経験率 **85%超**
- ・ 外国語授業の経験率 **80%超**
- ・ それぞれの授業方式が科目の理解に役立った学生比率 **80%前後**



*回答者 2019年度4年生 7,639名中6,494名（85%）。下図は、「未受講者」を除く回答者による比率。

事例2) カリキュラム (アクティブ・ターム等) 編成の改革

● 2014～2017年度：制度設計

✓ 科目ナンバリング* (全学的体系化)

✓ 2学期4ターム制の学事暦

例) 集中型による教育効果：7週完結型授業 (週複数回授業) 等

例) 必修科目のない期間の設定し、留学に活用 (アクティブ・ターム)



● 2017年度以降：部分的試行と検証

✓ S2 期間+夏季休暇期間 (6月～9月) の活用

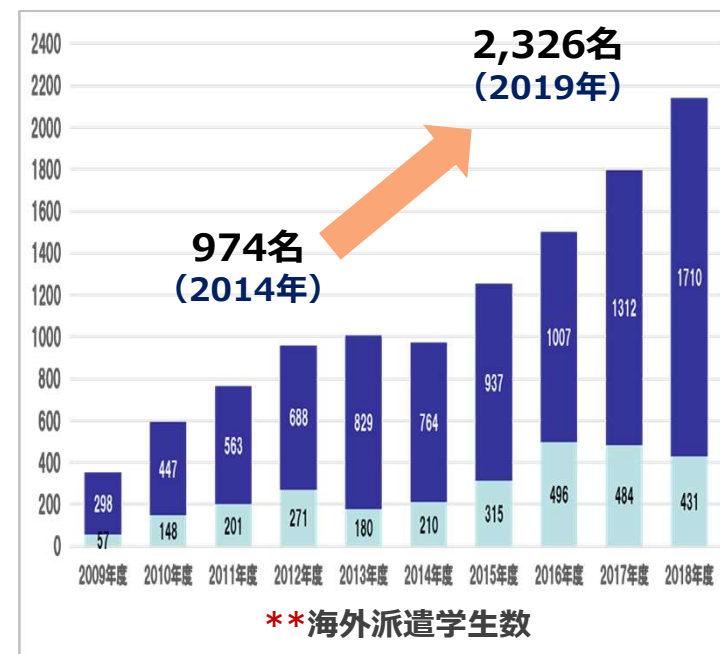
✓ セメスター留学、インターンシップ留学、海外大学のサマーセッション留学等の拡張

➡ 海外派遣学生数の増

● 今後の課題

✓ セメスター科目や通年科目と混在する場合、学生の科目選択が困難となる場合あり。

✓ 授業数の削減 (骨太なカリキュラム) は、現在も全学WGと各学部で改善策を検討。



*参考) 明治大学 科目ナンバリング制度 <https://www.meiji.ac.jp/koho/course-numbering/index.html>

**参考) 2018年度「明治大学データ集」(表13)より作成 <https://www.meiji.ac.jp/koho/about/hyouka/self/2018/index.html>

4 改革を支える明治大学の教学マネジメントの特色

～ 計画と評価のPDCAサイクルによる質のマネジメント

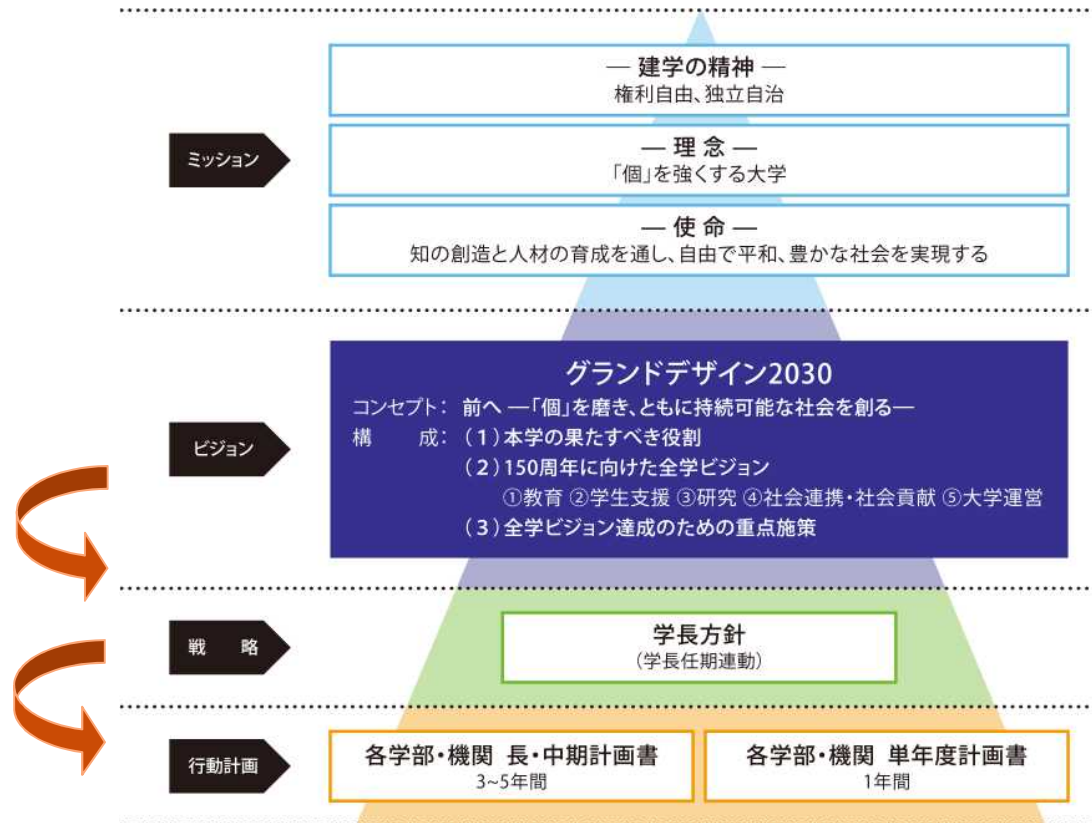
特色①：ビジョンの明確化と階層的な教学計画体系

● 目的の明確化

－「明治大学グランドデザイン2030」の策定

● 目的達成に向けた階層的な計画構造

－ビジョン（グランドデザイン）・戦略（学長方針）・行動計画（各学部等計画書）



特色②：全学と学部目標共有と目標の具体化

明治大学における目的達成に向けた方針の共有・具体化（イメージ）

グランドデザイン2030

ビジョン：国内外から多様な学生を受け入れると共に、世界に挑戦する学生を支援します。

目標指標：留学経験者比率：2030年に50%

学長方針（毎年度）

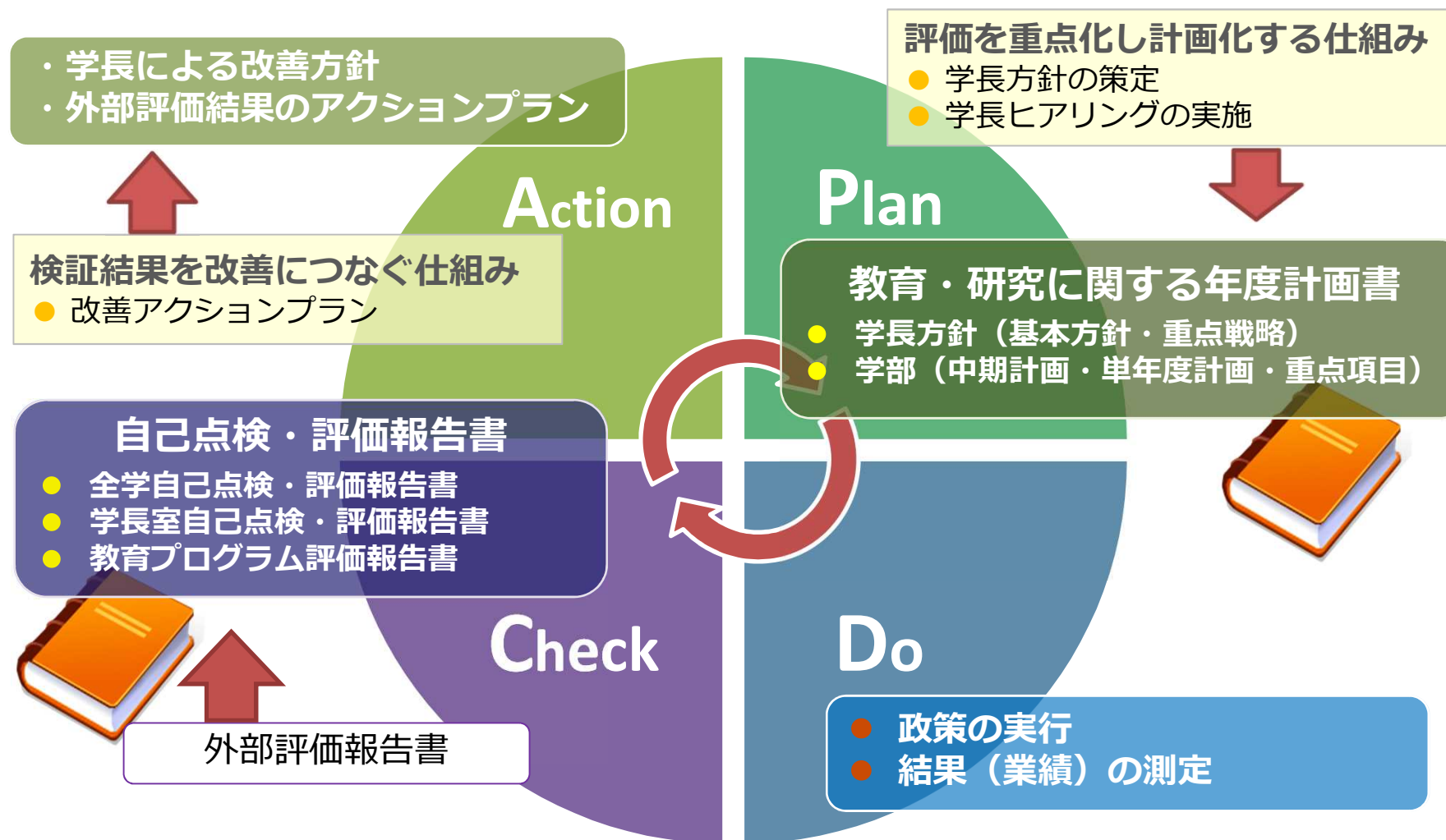
海外大学との共同開講や海外の教員を招聘することにより、外国語による教育を提供します。

学部等計画書（毎年度）

- ○○大学（米国）からの招聘教授セミナーを発展させ、相互交流科目を単位化します。
- ダブルディグリーコースを新設します。

- 
- ① 中長期計画（方針、3ポリシー等）
 - ② 単年度計画
 - ③ 重点項目（予算項目）

特色③：年度計画と評価を一体化したPDCAサイクル



特色④総括的評価を重点化・具体化するプロセス



特色⑤：レベル別のPDCAサイクル

全学レベル

学科（プログラム）レベル

授業レベル



学長室／自己点検・評価全学委員会

学部・学科執行部／学部等自己点検・評価委員会

全学的評価

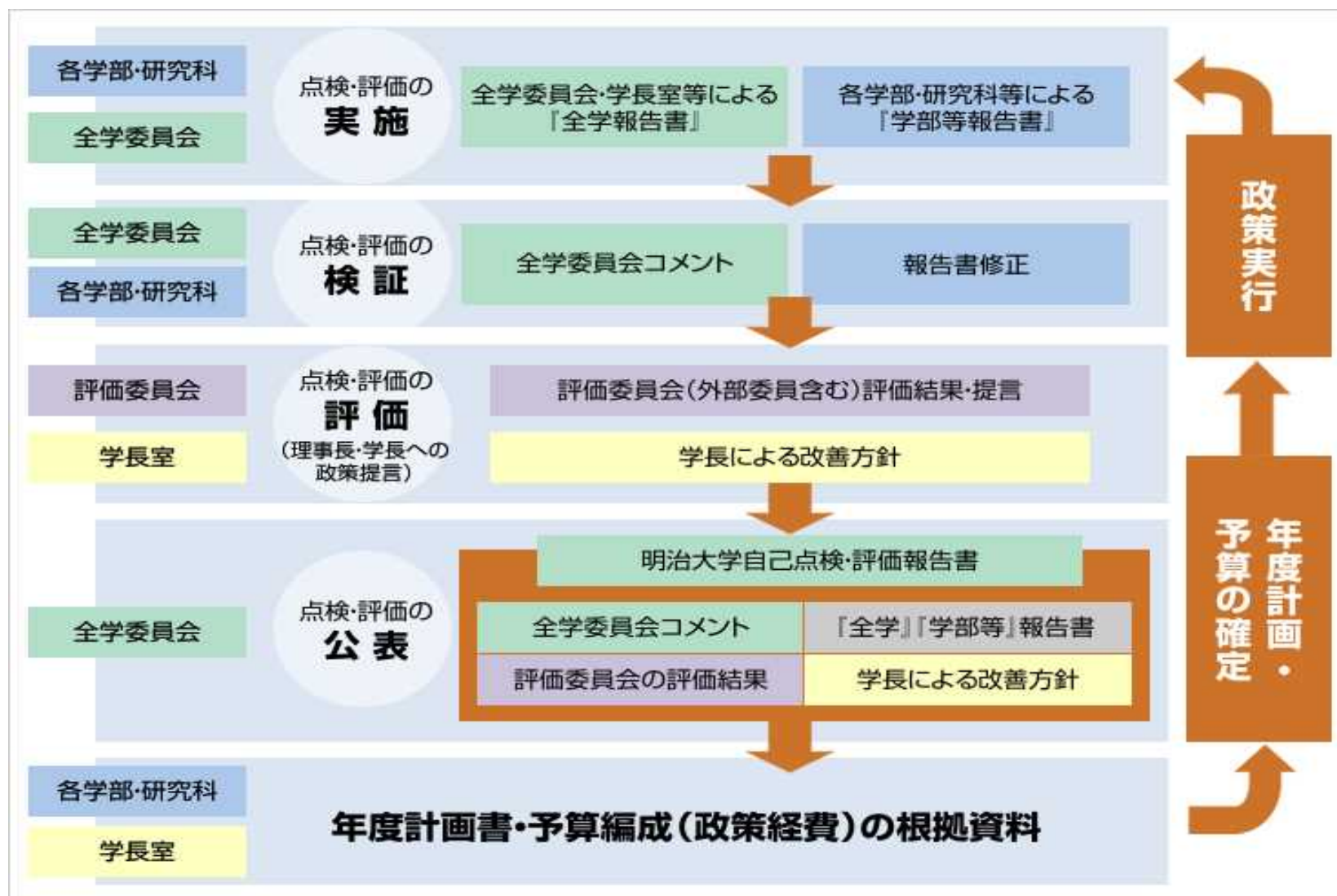
教育プログラム評価

- 学長方針（中期計画）
- 法令要件・認証評価基準

- 年度計画書（行動計画）
- 3ポリシー・基準の評価

- シラバス・到達目標
- 学び／授業アンケート

特色⑥：評価妥当性を担保する重層的評価システム



特色⑦：評価指標/基準を活用した改善計画

● 改善アクションプラン制度（3カ年計画）2008年～

- 認証評価結果を着実に改善することが目的。
- 特に、長中期にわたり計画的な改善が必要な事項を全学的に改善を管理する制度



- 達成すべき成果（アウトカム・アウトプット）の明確化
- 評価指標・評価基準の設定
- 期限の設定（年度目標および3年後の目標）
- 毎年度の測定（実行度，達成度，成果へのインパクト）
- 年度計画と自己点検・評価と連動
- Logic Model/Performance Measurement

記入例 (1年目終了時)

認証評価結果に基づく「改善アクションプラン（3カ年計画）」

1. 組織概要

部	全学 [学務部]	推進組織	自己点検・評価委員会
課	企画課 [学務部]		
担当	山本 〇〇		

2. 改善事項

3. 評価項目の状況（現状と目標）

4. 改善計画

5. 計画（P）見直し

6. 実績確認（D）と評価（C）

7. 3カ年計画（目標達成率）

8. 2008年度（実績）

9. 2009年度（目標）

10. 2010年度（目標）

11. 2011年度（目標）

12. 2012年度（目標）

13. 2013年度（目標）

14. 2014年度（目標）

15. 2015年度（目標）

16. 2016年度（目標）

17. 2017年度（目標）

18. 2018年度（目標）

19. 2019年度（目標）

20. 2020年度（目標）

21. 2021年度（目標）

22. 2022年度（目標）

23. 2023年度（目標）

24. 2024年度（目標）

25. 2025年度（目標）

26. 2026年度（目標）

27. 2027年度（目標）

28. 2028年度（目標）

29. 2029年度（目標）

30. 2030年度（目標）

31. 2031年度（目標）

32. 2032年度（目標）

33. 2033年度（目標）

34. 2034年度（目標）

35. 2035年度（目標）

36. 2036年度（目標）

37. 2037年度（目標）

38. 2038年度（目標）

39. 2039年度（目標）

40. 2040年度（目標）

41. 2041年度（目標）

42. 2042年度（目標）

43. 2043年度（目標）

44. 2044年度（目標）

45. 2045年度（目標）

46. 2046年度（目標）

47. 2047年度（目標）

48. 2048年度（目標）

49. 2049年度（目標）

50. 2050年度（目標）

51. 2051年度（目標）

52. 2052年度（目標）

53. 2053年度（目標）

54. 2054年度（目標）

55. 2055年度（目標）

56. 2056年度（目標）

57. 2057年度（目標）

58. 2058年度（目標）

59. 2059年度（目標）

60. 2060年度（目標）

61. 2061年度（目標）

62. 2062年度（目標）

63. 2063年度（目標）

64. 2064年度（目標）

65. 2065年度（目標）

66. 2066年度（目標）

67. 2067年度（目標）

68. 2068年度（目標）

69. 2069年度（目標）

70. 2070年度（目標）

71. 2071年度（目標）

72. 2072年度（目標）

73. 2073年度（目標）

74. 2074年度（目標）

75. 2075年度（目標）

76. 2076年度（目標）

77. 2077年度（目標）

78. 2078年度（目標）

79. 2079年度（目標）

80. 2080年度（目標）

81. 2081年度（目標）

82. 2082年度（目標）

83. 2083年度（目標）

84. 2084年度（目標）

85. 2085年度（目標）

86. 2086年度（目標）

87. 2087年度（目標）

88. 2088年度（目標）

89. 2089年度（目標）

90. 2090年度（目標）

91. 2091年度（目標）

92. 2092年度（目標）

93. 2093年度（目標）

94. 2094年度（目標）

95. 2095年度（目標）

96. 2096年度（目標）

97. 2097年度（目標）

98. 2098年度（目標）

99. 2099年度（目標）

100. 2100年度（目標）

特色⑧：プログラム・レビューの導入

● 自己点検・評価の見直し（2017⇒2018から実施）

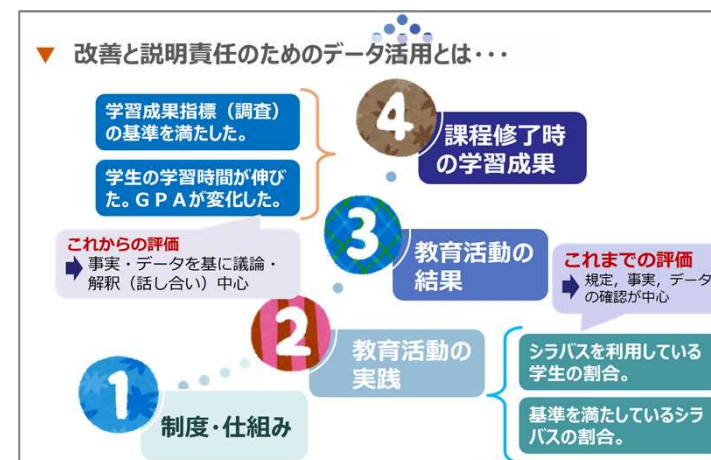
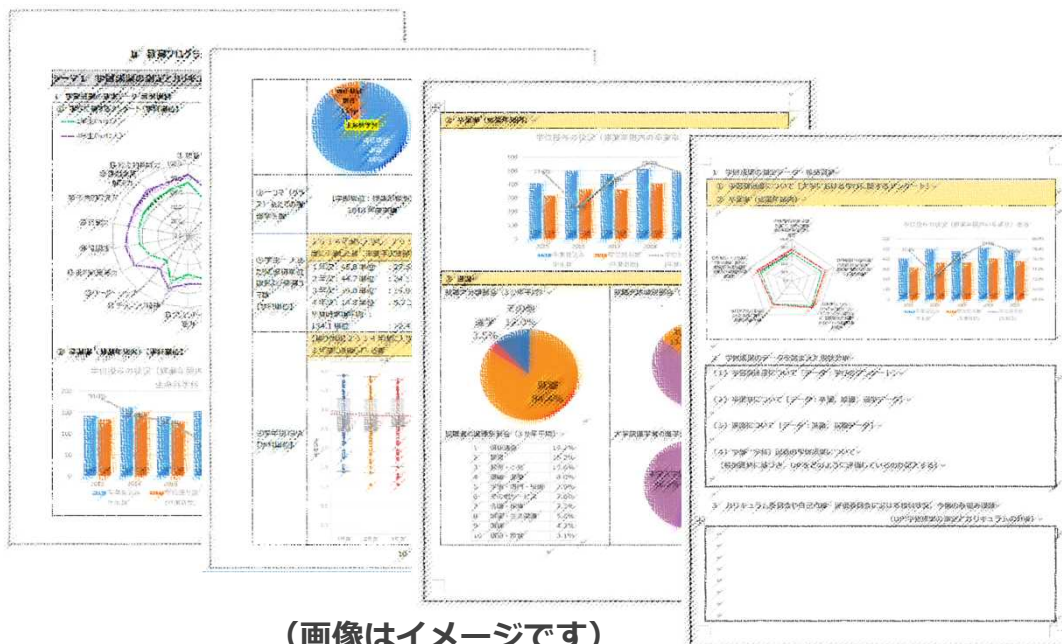
従来の評価制度（大学基準にそった評価）から、**教育プログラム（3ポリシーに基づく教育実態）**を検証・改善に導く、本学固有の評価基準に改正。

- ① 学科を単位（教育プログラム単位の評価）
- ② 3ポリシーを評価軸としたカリキュラムの評価
- ③ データ志向のフォーマット（IRによる支援）
- ④ ピアレビュー
- ⑤ 学科（学部長）総括と、評価結果の学長への報告
- ⑥ カリキュラムマッピング
- ⑦ 学生アンケートの活用

➡ 実施負担軽減とフォーム簡素化も考慮

特色⑨：データ活用とIRによる支援

- プログラムレビューにおいて「データの活用」を重視し、IRを活用して学科（プログラム）にデータを提供
- 記述中心であった評価から、データ（グラフ・図）を主体とした評価書に様式を変更**（下図参照）



評価におけるデータ活用の説明資料の例*

*参考）「データの使い方」ニュースレター「じこてん13号」：

https://www.meiji.ac.jp/koho/about/hyouka/news_letter/6t5h7p00000famel-att/6t5h7p00000kqrv4.pdf

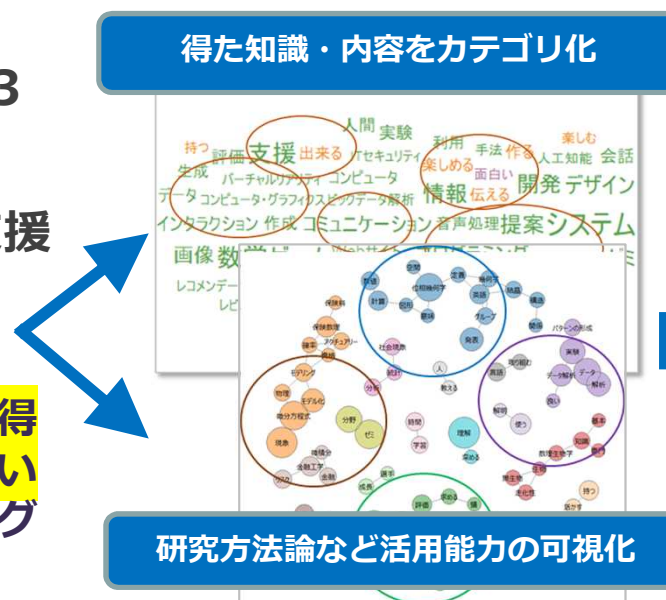
**参考）明治大学・関西大学IRシンポジウム報告（2018）「IRはプログラムレビューを支援できるか：IRオフィスの設計とデータ分析」

<https://www.kansaiu.ac.jp/ctl/2019/02/14/%E5%A0%B1%E5%91%8A1%E5%B1%B1%E6%9C%AC%E5%B9%B8%E4%B8%80%EF%BC%88%E6%98%8E%E6%B2%BB%E5%A4%A7%E5%AD%A6%EF%BC%89.pdf>

特色⑩：学習成果（学習行動）指標開発と活用の試み

● 学習成果指標（獲得した能力を示すもの）

- IRデータベースの構築と**各種レポートの活用**（2013年度から段階的に活用）
- IRデータ×就職キャリア支援部「学習成果の可視化プロジェクト」
 - ✓ キャリアシステム内の「**獲得した知識・内容**」「**力を注いだ授業**」の記述を教育プログラム単位でテキスト分析



- 企業向け案内誌の「学部案内」に活用（Career Center Guide Book）

● 学習行動指標（成長感、GPA等の間接指標の活用）

- 教務部「総合的教育改革ワーキンググループ」による**G P Aの活用・運用**に関する検討
- 自己点検・評価委員会「学びに関するアンケート」による**D P達成状況**
- 各プログラム独自の学習成果の設定（重視する科目、学生の活動成果など）

特色⑪：国際認証

● ビジネススクールにおける国際認証

- EFMD (European Foundation for Management Development)
- 学位課程・プログラムに対する認証制度 (EPAS) で、日本では初めて2018年に認証、2020年に更新のための実地調査を受審

＜評価の観点＞

- 
- ✓ 全学的なグランドデザインに基づく教育プログラム
 - ✓ 教育目標：MBAとしてジェネラルマネージャーの養成
 - ✓ 教育課程の特色：ファミリービジネス及びスタートアップビジネスに特化したクラスター（科目群）の設置
 - ✓ ILOs（教育効果達成度目標）の明確化
 - ✓ 英語による科目の提供
 - ✓ 社会人学生を対象とした短期海外研修
 - ✓ 国際化：イングリッシュトラック、外国人教員



- 世界各国からの学生の獲得
- 海外ビジネススクールとのネットワーク構築・教育連携

5 課題と展望

課題と展望

- 計画と評価の制度・システムの定着は必要であるが、制度・システムを動かすのは教職員である。
 - ➡ 改善に向けた議論があらゆる部門で常態化していること（常に問題意識をもっていること）によって教育の質は確保される。
- 学生個々の学習状況把握は必要だが（ポートフォリオなど）、教員負担、システム予算等、質にかかる負担は大きい。
 - ➡ 初年次のサポート、就職支援、国際化など、大学固有の取り組みへの特化も重要。私学には経常的な補助が必要な部分である。
- 学部運営、学部カリキュラムの独自性を活かすためにも、全学的なビジョンが必要となる。University ➡ Mix-versity
 - ➡ 学部の独自性なしに、教育の多様性は確保できないが、新しい分野の創造には、混合型・融合型の大学・教員組織（研究ベース、国内外の大学との連携など）による教育プログラムが重要になる。

Making Campus Decisions Better

